

---

# コープスパーティー <もう一つのパーティー>

焔の錬金術師ラビ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コープスパーティー<もう一つのパーティー>

### 【Nコード】

N3163V

### 【作者名】

焰の錬金術師ラビ

### 【あらすじ】

コープスパーティーの二次創作です

原作の後、もう一つの天神小学校に行ってしまった

神野たち9人は・・・

無残に殺されていく、誰がこんなことをするのか

いつたい犯人は誰なのか・・・

原作のゲームに負けないくらい頑張って書いていきます！

## 生きる

．．．．．ああ．．．

俺達は．．．生きてる．．．

俺、神野 恭は、今、生きてることを実感していた  
それと同様、杉崎 ヒロキ、桜庭 桜、須藤 唯の4人は  
ボロボロになった学ランとブレザー  
怪我をして傷ついた体．．．そして．．．

『仲間』が無残に死んでいったあの光景．．．

俺達は、生きていることをかみ締めている

最初は．．．．．もつといたのに．．．

9人ほどいた仲間の．．．．．5人は居ない．．．

みんな死んだ．．．あそこに．．．

あのおまじないに．．．

あの、怨霊に．．．

あの．．．．．子供に．．．

あんなこと．．．．．しなければよかった．．．

## 序章

「はいはいはーいーいー！団子追加ね？了解了解！！」

俺は素晴らしいながらバタバタ走り回っていた

今日は、ここ冥府学園めいふかくえんの学園祭だ

俺達は和菓子店を開くことにしていたが・・・

思いのほかに大繁盛！

ロキ（杉崎 ヒロキ）は接客を、かくしゅいか神楽坂 冬威としいは

レジと売り上げの計算を、須藤 唯、桜庭 桜、

西条 あずね、相場 恵、はちのへ八戸 鈴りんは

ロキと同様接客に必死だ

「おーいロキー団子だよー・・・って！テメエ！！何ナンパしてんだよ！！」

接客と乗じて思いつきりナンパをしている

わが悪友こと杉崎 ヒロキ、俺はロキと呼んでいる

は、にへらゝとしながら同級生くらいの女の子と雑談していた

「つち、なら井豪ゝたのむわ・・・って！！お前はお前で何サボってんだ！！」

同じく悪友の井豪 リョウヤは・・・客側になっていた

「え？お前お客様に働かせんの！？」

「それ以前に貴様は客じゃねえだろうがー！！！！！！！！」

俺の叫びとともに笑い声が響く



俺は叫んでひっくり返った

次の瞬間、電気がぱつとつき

「アハハハハハハハハハハハ！神野だっさー！ーい！」

ロキは腹を抱えて大爆笑

みんなもハハハハは！と大爆笑

仲良し9人組で学園一有名な俺達・・・

その中でもっとも怖がりなのだ・・・俺は・・・

「うつさいなー！そんなに笑うなよ」

俺は顔を真っ赤にして反抗する

「いいじゃんかー！神野は超ビビリなんだからさ」

「うつさいわ！！変態！！」

俺はロキにつかみかかるが、それを逃げる

「つたくよー・・・いいからもう片付けしようよ」

俺は素晴らしいながら机を運ぶ

「だなー」

ロキも片付け再開

「きょーくんきょーくん！！それよりもさー私とアソボーよー」

そっぴいながら自称チャームポイントの右側側面に結んだ髪の毛をくるくる回すのは須藤 唯

髪の毛は肩までのセミロング？それに加えて結んでいるので幼い顔立ちをさらに強調させる

俺の一番の理解者だと彼女は言う、外見は同じ年なのにちよっと幼く見えるのは幼い行動が多いイからなのだろう

周りから見ると俺になついていると聞くが・・・

こんな美少女の唯、だが、結構男女両方から敬遠されている理由は分らない、唯一この9人がまとも来接することが出来る俺は9人以外の友達がそれほどそいないだけにいつも唯と一緒にいる

そんなことを思いながら唯の頭を撫でながら

「はいはい、片付け終わったらねー」

そっぴいながら手伝わせる

そして、そろそろ終わりかけたころ

「そうだ！！これやるうよ！！幸せのサチコさん！！」

そっぴいつて出したのは、紙人形だった

「ずっとみんなと一緒にいられるって言うお呪い！！」

そっぴいつてみんな困む

「いい？今この人数の数だけサチコさんお願いしますって言うの！  
このときの注意はね？絶対に人数より多かつたり少なかつたりするとダメなの

失敗しちゃうから！」

「何でそんなことしつてんの？」

ロキはそっぴに問いかける

すると、ちよつと顔を赤らめ

つてかこいつ、ロキに話しかけられるとすぐに赤くなるな

「ねたを集めるためにネットで調べたら偶然見つけたの！！」  
そっぴいながら始めようとする

「えつと9回だっけ？」

「うんそだよー」

サチコサンお願いします、サチコサンお願いします、サチコサンお  
願ひします

サチコサンお願いします、サチコサンお願いします、サチコサンお  
願ひします

サチコサンお願いします、サチコサンお願いします、サチコサンお  
願ひします

つと・・・

「みんな唱えた？じゃ仕上げだよ」

そういつてみんなに紙人形をつかませ

「さあ、一気にちぎって！！！！」

そういつて俺達は紙人形をちぎった



俺達は叫びながら地面におちってった

っていうか!!ここは4階!!

1階までだいぶだと完全に死ぬ!!

そう思いながら俺は、一人堕ちて言った

「唯!!!」

俺は素晴らしいながら唯に向かって手を伸ばす

「・・・ん・・・!!!」

唯もそれに乗じて手を伸ばす

指が触れるであるう直前、さらに落ちる速度が速まってしまう

「くそがつ!!!唯!!!イジでもつかめ!!!」

素晴らしいながら腕の血管がはちきれんばかりに伸ばす

そして、ようやく手をつかめた、そう思った瞬間

<ドサ!!!>

「があ!!!」「きゃ!!!」

と、俺と唯は1階と思しき場所に落下した

っていうか・・・唯が俺の上に落ちたおかげで彼女は無傷だ

まあ俺の体が痛いかな!特に鳩尾!!!

「いってーなあ・・・唯、大丈夫か?」

「う・・・うん、かばってくれてありがとう」

そっぴいながら立ち上がる俺と唯、だが、何か違和感に気がつく

「あれ?・・・ここ・・・俺達の学校じゃない?」

そこは冥府学園ではなかった

どこか見慣れない・・・学校?

そこは、酷くアレすさんだ廃校舎だった

「なんだ？ここ・・・」

そついいながらとりあえず教室をテクテク歩いてみる

しっかし、何だここは？

そこらへんはボロボロだし、床は穴だらけだし・・・  
堕ちたら即死だぜこりゃあ

そんなことを考えながら歩いてると

「きゃーーーー！！！」

唯が突然悲鳴を上げた

「っ！！なんだ！唯！！！」

俺は即座に唯に向ける

「こ・・・これえ・・・」

半ば涙目の唯が指差したのは、学校新聞？

そこにはやぶれていたのでも上半分でしか見えないがこう書いてあった

<天神小学校新聞：今日の話題は連続誘拐事件・・・・・・・・>

「これって・・・まさか・・・」

「だよね？きよー・・・くん・・・」

まさか、ここは・・・天神小学校・・・

不幸な事故があったといわれる廃校舎・・・

その中に俺達は・・・閉じ込められたのか？

天神小学校（後書き）

ああーあ、だーれか呼んでる人はいるのかな？

死んでもいいってんなら出しますよ！！

もともとコープスはそのうはなしだしなw w w

## 恐怖

「これって・・・マジで？」

俺は半分冗談だろうと思ってソット張り紙に近づいた

張り紙には、<ここから君達は出られない、さあ、僕等と一緒になろう>と

赤い文字、つまりは血の文字で書かれていた

「んだよこれ・・・悪趣味なことこの上ない」

そう思って唯のほうを向く

「ンなもんタダの冗談だよ、さっさと外にでも目指そうよ？」

そういつて唯に近づくと、だが、何かがおかしい

「唯？どうした・・・っ・・・!!!!!!」

俺達が目にしたのは、白骨化していた・・・いやその途中なのだろうと思われる腐乱死体だった

「う・・・そ・・・だろう・・・!!?」

俺はその場を離れそうになった、だが、その場にまだ唯がいることに気づき、なんとか思いとどまる

「唯！早く逃げようぜ、気味ワリイよ・・・」

いや、気味ワリイっつーかおかしくなりそうだ

だが、唯はそこからいっぽも動かなかった

おかしく思った俺は、唯に近づいてみる

「唯？どうしたんだよ」

俺は唯の肩をとん、とたたくと、唯は膝から崩れ落ちた

「っわ！唯！？」

俺はビククリして唯を抱える

どうやら気を失っていた

「どうしよう・・・このままだとアレだな・・・でも起こせネエし・・・」

そう思った俺は、とりあえず唯を抱えたまま行くことにした

抱っこって言うには俺は赤ちゃんを抱えるしか知らず

それは流石に・・・っと、思ったので・・・

「でもお姫様抱っこはやりすぎたかも・・・おんぶにしておけばよかった」

っそ、俺は唯をお姫様抱っこって呼ばれている方法で

抱えている、っつーかそれ以外知らないし

そんなことを考えてるうちに、目に前に昇降口が見えた

「やっとか・・・これでおさらばだ！！」

思いっきり唯を抱えてる状態で蹴りをドアに

ぶち込んだ、こんなボロ扉、すぐに壊れるだろ、そう思ったからだ

だが、現実はず違った

「・・・っな・・・」

ドアは壊れたいなかった。

いや、壊れるどころか、ピクリともしていない

傷一つついてないのだ

「そんな……うそだろ……」  
そんな時、けりの衝動が強かったのだろう  
唯が起きた

「……っあ、唯、おきたんだ」  
そういつて唯をおろす

「ん……でもこれって？」

唯は目の前の扉にわけがわかりません  
みたいな状態だった、まあ気がついたら扉だモンな

「ダメだ、ここ開かねえ」

そういつて俺は校舎の中に入ろうとする  
すると、やっぱり唯は混乱した様子で

「え？そんなわけないでしょ!？」

そういいながら扉をガチャっガチャする

「やめる、それはピクリともしねえ……俺達は閉じ込められてんだ」

唯は青ざめはじめ

「嘘……嘘嘘嘘!!」

「嘘じゃねえよ、お前も試しただろ？」  
そういつて俺は唯の手をとる

「……え?…な…なに？」

「屋上にいこ、それならたぶん……」

そういいながら校舎の階段を探し始めた  
そして、おくに影になっていて気がつくかつかないかの場所に階段  
があった

「うっし、これで」

そう思った矢先、恐怖が訪れた

「っひ・・・いや・・・」

「ん？どうした、唯・・・」

俺は唯がうるたえ始めたのに気づき、唯の向く方向を見た  
そこには、女の子がいた、赤い服を着ていた

だけど、その目は光を失い、力なく、視点もあつてない  
そして、その子の右手には、大きな大きな鉄はさみ

極めつけは、その少女の体は青く揺らめいていて  
顔には返り血なのか、その子の血なのかわからない  
少量の血がついていた

そして、そのこと目が合った

「っひ・・・う・・・うわあああああ！！！！！！」

俺は唯の手をとり闇雲に階段を上がった  
とにかく急いで、あの場所から逃げたかった

「ああああああああああああああ！！！！！！」  
俺は叫び続けた、叫び続けながら走った

走り続けた・・・

恐怖（後書き）

ひっさびさに更新したね

いやーなんかねたにつまっちゃってさあ  
WWW  
WWW  
WWW

## 閉鎖された空間

「ああああああああああ!!!!」  
俺は、ひたすら走り続けた

唯の手を引き、ただ、がむしゃらにがむしゃらに……

そして、何分走ったのだろう

たぶん、同じところを何回も回ったのだろう

同じ教室をちらほら見る

そして、ようやく落ち着いた俺は、唯の手をつかみ

「とりあえず……教室に行こう」

そういつて……えーっと3の4?に入った

幽霊はいないようだし……

ここなら安全かな?そう思った矢先……

『ぎ……ぎぶ……ぎみい……』

いきなり奥のほうから声が聞こえた

俺と唯はびくつ、として、恐る恐るその声のほうに近寄った

そこにあつたのは……死体

『ぎみい……ぎ……』

しかも腐乱死体……またかよ……

「っひ……いやあ……」

もはや大きな声も上げられない唯、俺は唯を後ろに隠して  
近寄ってみた

すると、いきなり腐乱死体が起き上がった

「っひ!!」

「うわあああ!!!!」

俺は思わずその死体に蹴りを入れてしまった

もしかして・・・まだ生きていたのか!?

そう思つて慌てて死体と思しきものに近寄る

だが、そいつは倒れると同時に体から青い炎が出た  
そして、死体は倒れた

「・・・なっ・・・だよっ・・・これ・・・」

俺は手元にあつた木の棒を持ち

炎に近寄る

すると、炎から声が聞こえた

「君たちが・・・次の犠牲者か・・・」

「え？」

俺はいきなり話しかけられてビクリとしたものの  
気になる点が出たので追求することにした

「俺達が犠牲者ってなんだよ」

すると、人魂は炎を揺らめかせてこう続けた

「僕は君たちと同じここに監禁されたものだ・・・」

「んな!?!」

「監禁!?!」

俺も唯も声を上げる、人魂は続ける

「この学校は君たちのいた世界とは切り離されて存在している・・・  
君たちはこの学校から出ることは出来ない・・・」

「そんな・・・」

唯は呆然と座り込んでしまった

「ここは恐ろしい力を持つ怨霊が作り出した異次元空間  
僕も脱出できず・・・ここで死んだ」

「異次元空間・・・」

確かに・・・いくら力の弱い俺でもあんなボロドア蹴破れるはずなのに・・・

ピクリともしなかった・・・

「怨霊の力でここには罪のない人たちが次々とここへ監禁されているけれど

いままで脱出に成功したものはいない・・・」

すると、人魂は一呼吸おき

「今回も君たちだけでは無い、同時にここへ連れてこられた人間が  
何人かいるみたいだ」

「ロキ・・・井豪・・・みんなも・・・」

それはある意味希望の光でもあった、コンナ空間で仲間がいるなら  
・・・

「だが、会えない・・・」

「なっ!?!?」

絶句した、せつかくの光が・・・

「ここはいくつ者空間が重なって出来たもの、多重閉鎖空間なんだ・

・・・」

「君たちの仲間もこの学校内に存在しているけど・・・いる次元が違う次元が違えば会うことは出来ない・・・」

「そんな・・・せつかく・・・」

「だが、希望はある・・・」

「え？」

人魂は僕等を温かく見守るような目で、こういった

「忘れていたが、以前にここに来た人間が・・・5人だけ・・・脱出に成功した」

ソレを聞いて俺は飛びついた

「マジか！？どうやって！！方法は！？」

だが、人魂はわからないと頭をフリ

「方法はわからない、だが、出られた、だとすれば・・・」

「ここから出られるかもしれない・・・」

「うん・・・君たちは・・・僕等のようにならないでくれ・・・」  
「そういうと、人魂はフッと消えた」

「まだ・・・希望はアル」

俺は呟いた、そして、唯の手を引き

「行こうよ、まずは次元を超える方法を探さないと」

「うん・・・わかった！がんばろう！！」

唯はニコットしながら手をつかみ立ち上がった  
そして、俺達は教室を後にした

ロキ・・・井豪・・・みんな・・・生きててくれよ・・・  
そう心で願いながら・・・

## 閉鎖された空間（後書き）

メチャクチャ久しぶりに更新だぜ！！

中間テスト中にwwww

だって現実逃避とか必要じゃん？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3163v/>

---

コープパーティー<もう一つのパーティー>

2011年10月13日16時48分発行